

【ハイチ地震復興支援事業】

東 5 階病棟看護師 矢野 佐知子

2011 年 1 月から 6 カ月間、中央アメリカに位置するハイチ共和国という人口 980 万人の小さな国で、国際赤十字が行う地震復興支援事業に従事してきました。当事業は、2010 年 1 月に発生したハイチ大地震(犠牲者 22 万人以上)による被災者に対する支援で、震災直後の緊急支援事業から、引き続き日本赤十字社が支援しているものです。

ハイチのトイレ普及率は 17%で、田舎の地域に行くと家にトイレが存在しません。そのため、サトウキビやバナナ畑、家の裏などで用を足し、さらに上下水道や環境整備等の観念が低いため、下痢やマラリア、皮膚疾患が問題となっていました。そのような背景や地震による被災状況から、国際赤十字は復興支援事業として「保健／水・衛生事業」を開始し、私は水・衛生チームの『公衆衛生知識普及要員』として、現地の看護師さんたちと共に活動を行っていました。

水・衛生チームの主な活動内容は、井戸の修復や配水管の整備、トイレの建設、そして、それと並行して行う公衆衛生知識普及活動です。普及活動ではまず、対象地域 10～15 世帯ごとに 1 名ボランティアを選び、4 日間のトレーニングを開催します。それを受講したボランティアは、地域住民の方々に対し一週間に 1 回程度、伝達講習を行います。具体的には、生活習慣を絵にしたカードを用いて、住民の方々には水・衛生に関する生活習慣を振り返ってもらい、問題点や解決策を自身で考え、行動変容につなげていくという、地域参加型のものです。しかし、トイレを使う習慣がない方々にその必要性を理解してもらうことは、簡単なことではありません。管理方法にも個人差があり、1 週間後に訪問するとすでに汚染していたり、鍵をかけてしまっていたり…。また、逆にトイレの壁一面に好きな俳優のポスターを貼りめぐらしている方々もいました。

そんな地域住民の方々をサポートしていたのが、水・衛生チームの看護師たちです。4 人の看護師と通訳兼アシスタント 1 名の計 5 名でしたが、経験や知識が豊富で、非常に頼りにしていました。オフィスワークは苦手なレポートの作成には時間を要しても、人前でのプレゼンテーションは大得意で、タイムマネジメントも完璧です。その中で私の役割は、活動内容の決定や物資の調達、スタッフのシフト作成、他のチームメンバーや援助機関との調整等を行うことです。現地スタッフは意見もはっきり持っているので、ぶつかり合うこともありましたが、よく話し合い、協力しあって活動を行っていくことができました。

ごみの山で交通渋滞が起きたり、道端で用を足したり、修復した井戸の真横で洗濯したり…「ほんとにこの方法で行動変容に移せるのか…」と思い悩むこともありましたが、しかし、たくさんのボランティアの方々に「非常に大切なことを学んだ。赤十字にありがとうと言いたい」と言ってもらい、また、実際にトイレや井戸の掃除を自主的に行っているのを見て、「できるだけ支援を続けていこう」とチームで話し合いました。

甚大な被害であったため多くの援助機関が参入し、コーディネーション上の問題もありました。しかし、情報や物資の共有、また必要時は会議を開き、可能な限り協働できるよう努め、私自身、協力することの必要性を学びました。また、非常に多くの赤十字社が参入しており、赤十字のグローバルネットワークをひしひしと感じました。当事業は復興支援として、2012 年 10 月まで引き続き行う予定となっています。

住民の生活習慣を絵にしたカード



手洗いの方法・必要性の普及活動



修復した井戸の管理方法について住民と話し合い



公衆衛生普及チーム、現地看護師たちと(左端が矢野看護師)

